
魔女の小さな森

葉琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の小さな森

【Nコード】

N0728Z

【作者名】

葉琉

【あらすじ】

森の中にある店には、変わり者の魔女が住んでいる。彼女が店で扱っているのは、役に立つ薬から得体のしれない品物まで様々。そこに家政婦を兼ねた店番として住み込むことになったごく普通の女性と、店主である魔女、そして、不思議でおかしな客たちとの、どこか日常から外れた物語。一話読み切りになっています。

1・あめ

その店は、村に近い森の中にあった。

比較的穏やかな獣や、大人しい魔獣しかいないため、子供たちの遊び場にもなっているその森に、いつ頃その店が出来たのかは、わからない。

村で一番の年寄りも、自分の祖母が生まれた時にはもうあったと言っ。

今の店主が村にやってきたのは20年も前のことだが、それまでは、違う女性が店にいた。

その女性以前は、若い夫婦だったらしいが、彼女らの代替わりがどうやって行われ、どういう理由があつて次の店主に選ばれるのかも、誰も知らない。

ただ、扱うものはいつも同じで、役に立つ薬草から、得体の知れない薬や物まで様々で、必ず店主は魔女なのである。それだけは、ずっと変わらない。

そして、現在そこに住んでいるのは、店主である魔女と、近くの村出身の女性二人きりだった。

しばらく雨が続けている。

どこか湿り気をおびた店内を眺めながら、店番を兼ねてこの家に住んでいる多紀は、溜息をついた。

時期とはいえ、こう雨が續くと、建てられた年代もわからないくらい古い店舗兼住居である建物は、あちこちで困った事態になる。

例えば、湿気で扉がうまく開かなかったり、普段使わない部屋で雨漏りがしたり、部屋の椅子や敷物がかび臭くなったり、などである。

掃除はこまめにしているし、空気もなるべく入れ換えるようにし

ているが、どうにもならないこともあって、店と住居部分の管理を任されている身には憂鬱な時期なのだ。

客足も鈍るが、それでも、雨の日が続くと、やってくる客もいる。その客の目当ては、森の中で採れる石だ。

晴れた日には他の石と同じにしか見えないが、雨が降り、水を蓄えると独特の光を放つ。魔女だけでなく魔法使いと呼ばれる人々から、魔力の宿るそれは重宝されており、好んで装飾品に使ったり、砕いて一般の人向けのお守りを作ることもあった。

この森には、その良質の石が多数存在している。

森の所有権を主張する店主は、それを結構な高値で売りさばっていた。そのため、魔女は石探しには比較的熱心なのだ。

多紀は、窓の外を眺める。

前回来たの日から数えても、そろそろ『常連』が訪れてもいい時期だった。

そう思っ、暇潰しに広げていた雑誌を閉じる。

時刻はちょうど、お昼の少し前。

朝の弱い魔女も起きてくるだろう。そう考えて立ち上がりかけた時だった。

重い扉がゆっくりと開き、風と雨が室内に吹き込んでくる。

客が来たことが分かるように取り付けられた小さな鈴の音も、今日は風に吹き消され、聞こえない。

それでも、扉が開いて入ってくるのは『客』とわかっているので、愛想笑いを浮かべつつ、多紀は顔を上げる。

「いらつしやいませ」

いつものように声をかけるが、開いたままの扉の向こうから、雨の雫だけでなく木の枝や葉が舞い込んできて、思わず動きを止めてしまう。

それに気が付いたのか、外にいた男が慌てて中に飛び込み、扉を閉めた。

「悪い、汚しちまったか」

申し訳なさそうに謝った男は、扉の前から動かずに立ち尽くしている。

着ている外套はびしょ濡れで、そこから垂れた水滴が床を塗らすことを気にしているのかもしれない。

「お気になさらず。魔女の部屋の惨状に比べたら、そんな水滴や風で飛んできた木の葉なんて、かわいいものです」

「雫さん、相変わらずだなあ」

店主の名前を口にする、男は笑う。

この店舗兼住宅の主は、散らかすことは得意だが、片付けるのは苦手という困った性分なのである。多紀が何度部屋を片付けても、嫌がられるくらい文句を言っても、面倒の一言で終わらせてしまう。住居の様子は客には教えていないが、雫がこちらへ来るときは、だらりと服を着崩していたり、髪が跳ねていたり、どこに物を置いたがわからなくなつたと言っては、多紀に怒られているので、客も大体の様子を察しているのだろう。

「いつもの、あれでいいんですよ？」

男の脱いだ外套を受け取りながら多紀が問いかけると、ああ、と彼は言った。

「どうしても、ここの森のじゃないとダメっていうからさ」

困ったような顔をして、どこか男は嬉しそうだ。

「用意してあります」

「さすがだね」

面倒、眠いが口癖の魔女だが、金払いのいい客に対しては重い腰も簡単に上げる。

そろそろこの男が来るころだと、ふつぶつと文句を言いつつも、

魔女は昨日森の中へ出かけていったのだ。

「今回の石は、上物だって言っていましたよ」

外套をかけた後、男に椅子を勧めると、多紀は用意していた袋を手渡す。

確認のために、男は中身を見るが、小さく肩を竦めて首を振った。

「やっぱり、どこがどうすごいのか、わからない」

男の言いように、多紀も笑う。

そうなのだ。この石は、魔力を持たない者が見ても、小汚いただの石だ。当然、多紀にもそこらにごろごろしている石と同じにしか見えない。

「私ですよ。だから、うっかり捨ててしまわないように気をつけているんです」

拾ってきたものを所定の位置に雫が置いてくれないので、大事なものが行方不明になるたびに、家の中を歩いて探し回るのは多紀だ。それほど広くはないし、雫の大体の癖を把握してしまった今では、どこらへんに何を置き忘れるかなどわかっているが、ここへ来た当初は失敗もよくしたものだ。

「でも、雫さんが見つけたものは、いつも品質が良いって、誉める。この森の状態もいいんだろうな。俺たちがいる場所は、あんまり良い感じの場所じゃないしな」

男の顔は、話しながら、段々と緩んでくる。

頭の中には、この石を欲しがっている相手 魔女なのだが、

その姿が浮かんでいるのだろう。

雫が言うのだから、どこまで本当かはわからないが、この男は、魔女に惚れて、その彼女を振り向かせようと、熱心に贈り物やらなにやらを渡しているらしいのである。雫の扱う石も、どこで聞きつけたのか自分の惚れた魔女が欲しがっていることを知って、わざわざ隣国から買いに来ているのだ。

雫のように主を持たない魔女は自由気ままに生きているが、男の思い人は、生まれた時から仕えている主がいて、他国にはほとんど出られない。だから、代わりに俺が、ということらしいが、その熱心さと根性には、頭が下がる。

もっとも、雫に言わせれば、魔女は変わり者が多いし、恋愛に關しても淡泊なので、そのくらいしても振られることがほとんどらしい。

それでも諦めない男に、雫は、どこまであの根性が続くのかが気になるらしく、密かに男の来店を楽しみにしているようだった。

案の定、多紀と男が話している声が聞こえていたのだろう。

「相変わらず、骨抜きだねえ」

店と住居を隔てる扉が開き、中から中年の女が出てきた。

いつもとは違い、少しだけちゃんとした格好　　といっても、

一歩間違えれば寝間着と間違えられそうな着方ではあるが、雫にしては上出来な姿をしている。

髪もちゃんと梳かした状態だ。

「魔女なんか惚れて骨抜きにされちゃうなんて、どうかしているよ」

いつもと同じように、皮肉なんだか、面白がっているのかわからない言葉を、男に投げかけた。

しかし、男の方は、気にしていない。反対に、骨抜きなのは確かだなどと、呑気に言っている。

「まったく、嫌味も通じないとはね。ところで、いい返事はもらえそうかい？」

「どうか。でも、笑ってくれるようになった」

彼の思い人の魔女は、無愛想で、あまり笑わないという。今日の前にいる魔女とは大違いだ。

「それに、名前を呼んでくれるようになったし」

きちんとしていればそれなりに整った顔をしているのに、『でれでれ』という言葉がぴったりの表情を浮かべているため、全部台無しだ。

雫はそれを見て、笑いをかみ殺している。

「おまけに、次の休みに日に、部屋に招かれた」

男ににやにや笑いは止まらない。さっきよりもひどくなっている。

「惚気はそこまで。耳がおかしくなるよ」

棚においてあった煙草に手を伸ばすと、雫はわざとらしく溜息をつく。

雫の気持ちは、多紀もわかる。

来る度、惚気話はどんどんふくれあがっていくのだ。

それでも多岐が黙って聞いているのは、男が本当に嬉しそうだからなのかもしれないし、こんなに愛されている魔女というのに興味があるせいかもしれない。

多紀が唯一知っている魔女は雫だけだから、様子もまるで違う魔女がいるのだと思うだけで不思議な気分になるのだ。

世の中の魔女には変わり者も多いと言うが、男から聞く件の魔女は、変わってはいるが、雫とは違うおもしろさを持っているような気がしている。

「また、来る」

そう言って、嬉しそうに帰っていった人が、再び訪れることはなかった。

魔女の手をとって、二人で逃げたと聞いたのは、季節を越えた頃だろうか。

「どうしようもないね」

そう言って雫は笑っていたが、念願かなって魔女を手に入れた男に対して、悪い感情は持っていないのだろう。

そうでなければ、彼女が、言われる前に石を探しに森をうろついたり、客の相手をするために、店へ顔を出すことはない。

「幸せになれるといいですね」

多紀が言くと、雫はなれるさと自信たっぷりに答える。

「なにしろ、根性で魔女を口説き落とした男だよ」

「いいなあ、私にもそういういい男が現れないでしょうか」

「むりむり。こんな森の奥で、魔女と暮らしている限り、いい男なんて現れたりしないよ」

「ですよ」

やってくるのは、得体の知れない相手ばかりだ。

その中の、たまにいる『男』は、すでに相手がいるか、何か裏がある者ばかりなのである。

あまり、恋愛方面でお近づきにはなりたくない。

かといって、多紀の幼馴染みの男達はほとんど結婚してしまっているし、年の近い知り合いの男性もいない。このままでは出会いがないまま行き遅れ人生まっしぐらなのは間違いなかった。

だから、あんなふうに純粹に思いをぶつけられた魔女のことは、少しだけ羨ましくもある。

「ほとぼりが覚めた頃、二人で店を覗くと言っていたよ。あの魔女は、この森に興味があるようだからね。自分の手で石を採ってみたいんだとさ」

「本当ですか？ 私、楽しみにしてます」

男がベタ惚れだという魔女に会ってみないと、多紀は思っていたから、その約束は嬉しい。

雫が吐き出した紫煙が、静かに立ち上っていく。

少し籠もった空気を入れ換えようと、多紀は窓を開けた。

窓から見えるわずかな空を、雲が厚く覆っているのが見える。

また、雨がしばらく続くのかもしれない。

もし、二人がやってくるとしたら、やはり雨の日なのだろうか。

いつか叶えられるかもしれない約束を思いながら、多紀は今にも降り出しそうな空を見上げた。

2・いと

『糸車を無くしてしまったのです』

その客は、細く長い指先でゆっくりと髪をかき上げながら、そう言った。

あらわになった首も細い。

きつと、服に隠れて見えないところも、細いのだろう。

「それは、つまり、糸車を探してほしいということでしょうか？」

一応ここは魔女の店だ。

物は売るが、探し物をするのではない。だいたい、そんな面倒なことを、主である雫がするはずもない。

『いえ、どこで無くしてしまったのかは、わかっています』

悲しげに俯いた客の目から、ほろりと涙がこぼれた。

奇麗な透明の水滴は、頬を滑り落ち、客の白い服に染みを作る。

その染みは、やがて青黒く変色し、服に穴を開けた。

ああ、やはり、と多紀は思う。

入ってきた時から、おかしいなと思っていたが、目の前で泣いているのは、人ではない。

魔女の店に魔物の類が来るのはめずらしいが、ないわけではないので、驚かないが。

『申し訳ありません。糸車を無くして以来、力の制御が上手くできないのです』

自身が流した涙が服を駄目にしたことに、気が付いたのだろう。

客はそつと涙を拭くと、深々と頭を下げた。

『魔女ならば、わたくしを人のように見せる薬を作れないかと思ひまして』

「人のように見せる薬、ですか」

繰り返しながら、果たしてそういう薬を作ることば可能なのだろ

うかと考える。ここに住み込んで数年。魔女である雫から、そんな薬の話を聞いたことはなかった。

だが、ないとは言えない。彼女が知らないだけで、存在するのかもしれないのだから。

どちらにしても、雫に聞くことが先だろう。

「店主に確認してまいります。少し待っていただけますか？」

そう言う、はいと答えて客はゆっくりと頭を下げた。

起きてくださいと寝台の中の店主を揺さぶると、布団の中からうるさいねえとくぐもった声が聞こえた。

「ちゃんと起きてるよ。あんまり気持ち悪い空気がただよっていたから、出ていくのが嫌だったのさ」

面倒そうに起き上がり、傍らにある煙草に手を伸ばしたのを見て、多紀が目を取り上げる。

「寝台の上での煙草は禁止って、何度も言っているじゃないですか」
強引に煙草を取り上げられ、雫が不服そうな顔をした。

「私の家なのに……」

そうぶつぶつ言いながらも、雫は寝台から下りる。そのままの格好で出て行くとするのを見て、多紀が慌てて服を引っ張った。

「着替えくらいしてください」

「はいはいはい」

「返事は1回で！」

多紀が手伝って、というよりも、多紀にされるがままに服を着て髪を整えられ、準備が終わった時には、雫は『ああ面倒』をすでに5回も口にしていた。

「あれだけ瘴気をまき散らしているんだからねえ。絶対面倒事だっ
て思ったんだよ。ぐずぐずしないで、逃げちまえばよかった。……
ところで、多紀、あんたちゃんと瘴気除けのお守りを持っているだ
ろっね」

「当然です。この若さで私、まだ死にたくないです」

魔女ならともかく、何の力もない多紀が、魔物相手に真正面から向き合って話が出来るわけがない。

しかも、相手は、まったく力を制御できず魔物の特徴でもある瘡気が漏れまくりな状態なのだ。

「よし。ならば、会いに行こうじゃないか」

面倒だといいながら、どこか面白そうにも見える雫の後ろをついて歩きながら、多紀は急いで先ほど魔物が言ったことを伝えた。

「詳しい理由を聞こうじゃないか」

雫がそう言くと、椅子に座っていた魔物は、おずおずと顔を上げた。

「どうして、人間に見せかけたいなんて思ったんだい？ 糸車は無

くしたと言っていたけれど、それが関係あること？」

『無くした糸車を拾ったのが、魔法使いだからです。そして、彼はそれ持ち帰り、自分のものにしてしまいました』

「それは災難だったね。魔物の持ち物は、使いようによっては、魔法使いの益になるからね。欲しがる奴はいくらでもいる」

魔女と呼ばれる人間は、生まれた時から持っている魔力の量は決まっているが、魔法使いの力は生まれつきのものではない。才能ももちろん必要だが、膨大な知識と努力があって初めて使える力なのだ。

だが、中には真つ当な方法ではなく、簡単な方法で力を手にしようとするものもある。

例えば、魔物の持ち物や、体の一部は、それ自体に魔力を有していることが多いので、足りない力を補うことも可能だ。故に、わざわざ魔物を狩ろうとする魔法使いもいる。

もちろん、その行為は誉められたことではないし、場合によっては魔力に飲まれ、自らを破滅させることにもなる。正式な魔法使い

たちの間では、表向きはよくないこととされているくらいだ。

『わたくしは、魔物としては中級程度の力しか持っていないのです。両親から受け継いだ糸車が無ければ瘴気をうまく押さえることもできない。最初は自力で取り返そうとしましたが、屋敷の外には魔物を退ける結界があるため入れないし、魔法使いが外に出たときを狙っても、気配でわかるのか、いつも逃げられてしまつて』

「だから、魔物の気配をうまく消して、魔法使いに近づきたいと？」

『はい』

「しかし、うまく人間に化けたとして、そううまくいくと思つているのかい？」

『人をたぶらかす方法なら、幾つも知っております故』

それまでおどしていたはずの魔物は、唇を釣りあげて笑つた。深い藍色の瞳が露わになり、怪しげな光を放つたのをみて、思わず多紀は手首の腕輪に視線を落とした。この腕輪は、雫特製の瘴気や魔力から身を守る守護がかけられたものだ。雫の腕は信じているが、相手の力が強ければ、完全に防ぎきることができない場合もある。

目の前の魔物は、自ら力の中級程度と言っているが、やはり彼らの目からは、魔女や魔法使いと違う得体の知れない力を感じてしまふのだ。

よく魔物と出会つて魅了されたという話を聞くが、そのどれもが相手の魔力が強いわけではないということも多紀は知っている。

それほど、魔物が人を魅了する力は特殊なのだ。

「あんまりうちの店員を脅かさないでくれよ」
身を強張らせていた多紀に気が付いた雫が、やんわりとそう口にする。

『ああ、申し訳ありません。うつかりしてありました』

その言葉とともに、魔物の目が自分から逸らされた気配がしたので、多紀は恐る恐る顔をあげる。

そこには再び目を伏せて悲しそうにうなだれる魔物の姿があつた。

「その依頼、引き受けてもいい。そうだね、報酬は、あんたが取り戻した糸車で紡いだ糸　　っていうのは、どうだい？」

『そんなものでよろしいのですか』

「あんたにとつては、そんなものでも、魔女にとつては、ありがたいもののなのさ」

雫は嬉しそうだが、多紀には魔物が紡ぐ糸がどれほどの価値があるのかはわからない。雫が扱うものの殆どがよくわからないものばかりだが、糸というくらいだからそれをつかつて布を作る程度のことしか思いつかないのだ。もちろん、それは糸が多紀が思う『糸』と同じという前提があつてのことなのだが。

「三日後においで」

その時まで、望むものを作つておいてあげるよと言つ雫に、魔物はまた深々と頭を下げた。

「さあ、多紀。あんたの髪をよこしな」

魔物が出て行つた後、雫が発した言葉に多紀は首を傾げる。

妙な行動や発言が多いとはいへ、意味のないことはしない雫だ。

その彼女が言つたのだから、魔物の欲しがる薬に、何か関係があるのだろう。

そう思うのだが、目の前で嬉しそうに笑い右手を差し出す雫に、うさん臭さを感じるのは、気のせいではないはずだ。

「魔力の欠片もない人間の髪を使って、ちよつとした薬を作ろうかと思つてね」

後ずさつた多紀に、彼女の不安を察したのだろう。一応手だけは引つ込めて、説明をする。

「違う薬の応用なんだけどね、試してみたい方法があつて」

雫が言うように、多紀には魔力はない。多紀だけではなく、この地に住む殆どの人間には、そんな力は存在しない。

数少ない魔女は別として、何百人に一人くらいしかない魔法使

いでも、最初持っている魔力は小さいのだ。

「私じゃないと、駄目なんですか」

「いや。誰でもいいんだけどね。村にいつて髪をくれって言ったら、ただの変質者じゃないか」

すでに村での評価は変人だということは知っているはずだが、そのあたりはいいらしい。

「それに、どのくらいの量が必要かわからないんだ。いちいち貰いにいくのは面倒だろう」

まさか髪の毛全部をむしり取る気なのかと、ため息をつきなくなる。さすがにそこまではしないと信じたいが。

「使うのなら、給料に上乗せしてください。それなら、いいです。でも、それって後から何か害が出たりしないですよ」

多紀にとって、魔物はわからない存在だ。生態や種族など、雫の元で働くようになって昔よりは詳しくなったが、彼らの考え方や行動は、理解できない。

そんな彼らに自分の髪が入った薬を使われるのは怖い。

「大丈夫。一応制限はつけるし、無理やり作る薬だ。持続性もないはず」

「ほんとですか。雫さんの大丈夫は結構あてにならないですよ」

思えばそれで、何度かひどい目にあった。

「よくわかってるじゃないか。さすが付き合いが長いだけあるね」

「ふんぞりかえって、言わないでください」

確かに付き合いは長い。

森に一番近い村で育った多紀にとって、ここは遊び場でもあった。幼馴染みたちと一緒に、探検しつくした森なのだ。魔女にいたずらしたことも、魔女からお菓子をごちそうになったこともある。

気まぐれで、面倒臭がりで、寝てばかりいるけれど、嫌いにならないのは、文句をいいつも相手をしてくれた思い出があるからかもしれない。

「ほんとに何かあったら、責任とってもらいますからね」

多紀がそう言うのと、その時は一生面倒くらい見るよと冗談めかして笑われた。

「それに、実際作れるかどうかわからない代物さ」

そう肩をすくめてみせる雫は、おもちゃを与えられた子供のようにも見えた。

結局のところ、彼女は薬を作ることが楽しいのだ。

失敗すれば、悪かったと客に謝るだろうし、成功すれば未練のひとも残さずに、それを客に渡すだろう。

自分の評判がどうであろうとも、気にしない人なのだ。

それが、魔女というもののなか、それとも雫がそういう性格なのか。

多紀にはわからないが、変人だと言われながらも、村の人たちに受け入れられているのは、そのせいなのかもしれない。

『約束通り、やってまいりました。薬はできていますでしょうか』

訪れた魔物は、多紀の姿を見るなりそう言った。

三日前よりも、さらになにもかもが薄く細くなっている気がする。そのまま消えてしまいそうでもあった。

「薬の効用は一時的なもの。せいぜい1日程度だ。今のあなたの体力と魔力では、失敗するかもしれない。それでもいいなら、持っていくな」

雫の言葉に、魔物は卓上に置かれた薄墨色の丸薬をじつと見つめていた。

やがて、細く白い指先がそれに触れ、転がし、確かめるように手に取ったあと、ゆっくりと頷いた。

「いただきます」

その藍色の目に強い決意を宿し、魔物はそう告げた。

うまく行ったかどうかは、いつのまにか届いた大量の糸が教えてくれた。

引っ張っても切れない透明で細い糸は、何かを連想させるものだったが、多紀は気にしないことにした。

その糸を雫が何に使ったかは、また別の話である。

3・うつくしい

そこは、どこにでもある小さな森だった。

強い魔物の気配も、大型の肉食獣の気配もなく、人の手が入ったことがわかる程度に下刈りされ、木々が日を遮らないように、細い道の上の枝は切られている。

人の出入りがあるのは間違いない。

ならば、すぐに誰かに見つかつてしまうのだろうか。

女は、木にもたれかかるようにして座り込んだまま、そんなことを考えていた。

迷い込んだ知らない人間に、どんな反応を返すだろう。

ここへ来る前に見た近く个村は、小さいながらも活気があった。

それなりに若者もいたし、広場では子供たちが駆け回っていたように思う。

目を閉じると、風に揺れる木々のざわめきが聞こえ、水の匂いもする。

穏やかで、心地よい森だから、村人がこの森へ来るならば、それはさほど先のこともないだろう。ここに素性の知れない女がいれば、警戒されるだろうし、もしかすると追い出されるかもしれない。それでも、動きたくないと思うのは、行く当てがないからだけではなく、居心地がいいせいだ。

このまま、この場所で朽ちていくのもいいかもしれない。

そう思っ、再び物思いに沈みかけたとき、足音に気がついた。

しめった地面に積もった葉がこすれるようなその音は、軽い。

思っていたよりも、見つかるのは早かったようだ。

村人が、それとも音からして、子供か。

確実に近付いてくる足音の方向を見ると、確かにそこには人がいた。

だが、予想に反して、立ち止まってこちらを見ているのは、小柄

な老婆だ。

綺麗に纏められた白髪に、暖かそうな上着を羽織っている姿は、普通の村人に見える。

だが、榛色の瞳は、こちらを値踏みするかのように鋭い。

ああ、彼女は魔女だ。

本능が、そう告げる。

同じ匂いだ。懐かしくもあり、忌わしくもある同族の氣配を投げやりな氣持ちで見つめる。

「魔女だね」

見た目よりも若々しい声で、問いかけられた。

「どうして、こんなところにいるの。主をなくしでもした？」

答えずにただ見つめ返していると、年老いた魔女はため息をついた。

「答えたくないなら答えなくてもいいけれど、私の大事な森で倒れられるのは迷惑よ」

あなたの森、と口の中で繰り返す。

「ここは、あなたの住処？」

かすれた声で尋ねると、老婆は笑った。

「そう。住まわせてもらっているわ」

「……一人で？」

暗に仕えるべき相手はいないのかとの意味をこめる。そのことが相手に伝わったのか、老婆は、そうだと答え笑った。

「強いて言えば、この森そのものが私の主でもあるわ。ここで暮らし、森を穏やかにし、ここで私は死ぬ」

歌うように、老婆は言葉を紡ぐ。

それに呼応するように、木々がざわめき、風が吹いた。

老婆は森に愛されている。

不思議なことに、感覺として、そのことがわかる わかつてしまっ。

同時に感じたのは羨ましいという氣持ちだ。

この森は美しい。優しく穏やかで、魔女の心さえも癒す。

それとも、目の前にいる魔女が穏やかな雰囲気を纏っているからこそ、森は美しいのだろうか。

見回すと、木々の間からこぼれる光が、柔らかに辺りを照らし、等しく老婆にも自分にも降り注いでいた。

「綺麗」

そう呟くと、老婆は優しい笑みを浮かべる。

「美しいでしょう？ この森は、ずっと魔女が守ってきた。私が何人目の魔女かはわからないけれど」

魔女が守る森。

その言葉に、女の口から溜息が漏れた。

だからこそ、こんなにつくしいのだろうか。

なにもかもなくしてしまい、見ている全ては味気ないものだったはずなのに、この風景の中にずっと埋もれていたいと思うのは、魔女が関わる森だからなのか。

そして、自身の目から、涙がこぼれているのは、何故なのだろう。
「馬鹿な子だね」

近付いてきた老婆に頭を撫でられ、その行為そのものが初めてのことだと知る。今まで、彼女に必要以上に触れたものはいなかった。母親も父親も、生まれたときにはいなかったから、抱きしめられた記憶もない。主は、あくまで女にとっては従うべきものであったから、やはり近くにあっても互いに触れ合うことなどなかった。『魔女』として暮らしていた屋敷でも、使用人たちは、彼女に対してはよそよそしく接し、こちらが話しかけなければ、近づくことも無かったように思う。

ならば、年老いた魔女が自分に触れるのは、同族であるという理由からなのだろうか。ほとんど隔離された生活を送っていた女は、他の魔女に会うのも初めてだったから、本当はどうなのかさえ、わからない。

「ずっと、一人だったの？」

「主は、いた」

「そう。それでも一人きりだったのね」

心が、という言葉に、何かがずとんと落ちたような気がした。

そうだ。確かに、主はいたけれど、いつも孤独だった。

「名前は？」

「雫」

そう答えると、いい名前だと誉められた。

唯一、主が自分にくれたものだ。好きではなかったが、それでも育ててくれた人だ。魔女の自分を必要だといってくれた唯一の人。

その家を出たのは、主が死んで、彼の後を継いだ息子を、どうしても新たな主として認められなかったからだ。

自分にとって、仕えるべき相手は、あの人であって息子ではない。ましてや、魔女などいらないといった男の側に、彼女の居場所は存在しなくなった。

「行く場所が定まるまで、ここにいればいいわ」

老婆の言葉に、雫は目を瞬かせる。

「いいの？」

「ここに迷いこんだのも、何かの縁。私も一人でいるのには飽きてきたところだし、後継者も必要なのよ」

「後継者？」

「そう。ここは魔女の森。私も、もうそれほど長くはない。だったら、誰かが引き継がなければならないでしょう？」

茶目つ気たつぷりに片目を閉じると、老婆は手を差し伸べ、雫の手を取る。

「でも、私が引き継ぐとは限らない」

躊躇う気持ちだが、老婆の手を拒みそうになる。

「別に、今すぐどうするか決める必要はないわ。私、ここでちよつとした店もやっているのよ。それを手伝ってくれるだけでもいいから。年をとって、力仕事も辛いよねえ」

そんなふうに言われて、ほんの少しの間なら、と結局雫は手を引

かれるままに、立ち上がった。

ほんの、短い間。

ちよつとだけ、この美しい森で暮らしてみてもいい。
どうせ、行く当てなどないのだから。

最初はそんな気持ちだったはずなのに、結局、女は小さな森の不
思議な店に、ずっと住み続けることになった。

4・えかき

絵描きが村に来ているんだってさ。

そう意味ありげに雫に言われ、商品整理をしていた多紀は、手を止めた。

普段のこの時間ならば、雫はまだ寝台の中のはずなのに、わざわざ店の方までやってきて、何を言い出すのか、と思ったからだ。

「何か企んでいます？」

声にやや不信感を忍ばせて、多紀は雫の反応を伺う。

いつもと同じようなにやにや笑いに、煙草。着崩した服は相変わらずよれよれで、普段と様子は変わらない。

だからといって、何か企んでいないと言い切れないのが、雫だ。

「いやだねえ、多紀。雇い主を疑うなんてさ」

それならば、もう少し真面目な顔と格好をすればいいのだ。

そんな胡散臭い顔で言われれば、警戒するのは当然である。

「自分の普段の行動を顧みてから、言ってください」

「欲望に忠実に生きているだけだ」

自慢にもならないことを堂々と言われて、多紀は呆れるしかない。いつものことだが、こうやって多紀をからかって、なかなか本題に入らないのも、雫の悪い癖だ。

「とりあえず、私、絵描きは嫌いです」

きっぱり言って、商品整理に戻ろうとした多紀の服を雫がひっぱる。

「おや、そうなのかい？ 絵描きなんて、会ったことも見たこともないはずだよ」

痛いところをつかれ、多紀が押し黙る。

恨みがましい目差しなのは、雫が言おうとしていることをなんとなく察しているからだ。

「それとも、絵描きになろうって奴に知りあいでもいるのかい？」
「知りません」

「とにかくさ、その絵描きに頼まれたんだよ。村まで届けてほしいんだってさ」

「……何をですか」

「剣」

「絵描きなのに？」

「ああ、絵描きなのにさ」

言いながら、雫は細長い袋を多紀に見せた。膨らみ具合から、恐らくそれが雫に言う剣なのだろう。

「この剣に、ちょっとした魔物避けの魔法をかけて欲しいって頼まれたのさ」

薬や得体の知れないものばかり扱う店ではあるが、こうやって持ち物に護符の効果のある魔法をかけて欲しいと依頼してくるものもいるのだ。労力が低い割には、金を取れるので、雫はよく依頼を受ける。

それ自体は珍しくはないのだが、問題は、いつ雫はこの剣を預かったのだろう。

店番をしているのは多紀だが、ここ最近、客は一人もこなかった。雫が村へ出掛けていないのも知っている。

それとも、多紀が知らない間にこっそり外に出たというのだろうか。

これが一番可能性がありそうだった。

「一昨日、夜中にちよつと森をうろついていたら、自称絵描きにばったり会ったんだよ」

まるで多紀の心の内を読んだかのように、雫は言った。

彼女は時々、ふらりと森の中へと足を踏み入れることがある。特に予定があつての行動ではないので、多紀もその全てを把握していなかった。

「夜中に剣を持って彷徨っている絵かきから依頼を受けるなんて、

何考えてるんですか。変な人だったら、どうするんですか」

比較的安全な森とはいえ、時には妙なものもやってくる場所だ。魔物程度なら、魔女である雫には害もないだろうが、悪意のある人間がこないとは言えない。昔に比べて平和になったとはいえ、夜盗の類がいなくなったわけではないのだ。

「いや、だって困ってたからさ」

「困るって、何を？　まさか、こんな小さな森の中で迷子とか、そんな馬鹿なこと」

「それが、あつたんだよ」

小さな子供でも迷わないこの森で迷子？

頭を抱えそうになった多紀に追い打ちをかけるように、雫の言葉は続く。

「なんでも、月に照らされた森を絵にたくて歩いているうちに、わけがわからなくなつたんだとさ。ほんのちよつと右に歩けば、森の外だったのに、妙な男だよ」

「そうですか」

やる気も聞く気もない多紀の手は、商品の方へと伸びている。やりかけの片付けを昼前までには終わらせてしまいたいのだ。それなのに、雫はさらに多紀の衣服をひっぱって、こちらへ視線を向けさせようとしている。

「で、話をしているうちに、意気投合してさ。私が魔女だってことがわかって、守護の魔法をかけてほしいとか言ってきたんだけど、その流れで、うちに店番がいるって話をしたら」

「勝手にそんなこと教えないでください」

「もしかしたら、多紀が知り合いかもって話になってさ」

「は？」

今度こそ、完全に、多紀の手が止まった。

大きく見開かれた目は、驚きというよりも、嫌な予感がするという気持ちを映している。

「だからさ、言つたのさ。だったら、剣に魔法をかけ終わったら、

あんたのところに店番を使いに行るよってね」
ひどく楽しそうな雫に、多紀は溜息とともに、信じられないと呟いた。

抱えた剣は、とても重かった。

当然だ。多紀は小柄な方ではなかったが、普段から大きな剣など持たない。せいぜい短剣だ。斧なら持ったこともあるし、それだつてそれなりに重いものだが、やはり『剣』というだけあって、どこか恐い気がする。この森で生活するようになってからは遠ざかつていたが、まだ街の屋敷で働いていたころ、それを奮うのを見る機会は何度もあった。

血を流して倒れる姿は見ていて気持ちのいいものではないし、倒れた人間を見て、腰を抜かしたこともある。喧嘩のあげく剣を振り回した人間も街では珍しくなかったのだ。

けれど、決してそれを見慣れるということとはなかった。

きれいな事だと分かっていても、森で獣を狩るのは違う、ただ傷つけ合うだけに使われる剣は、どうしても好きになれない。

それでも、腕に抱える剣に嫌悪感だけでなく、仄かに暖かいと思う気がするの、雫がかけた守護魔法のせいだろうか。

人の命を奪うためではなく、持ち主を守るといふ目的でかけられた力は、この森の気配と同じく優しい。

ただ。

気になるのは、この剣の持ち主であるという自称絵描きである。

自分を知っているかもしれないという相手。

変なところで迷子になったり、絵描きのくせに剣を持っていたり。そんな人間に、心当たりがないわけではない。思い出の中にしまい込んで、すっかり忘れていたが、そういうことを言いそうな相手をたった一人だけ知っているのだ。

思えば、その人物には雫同様、振り回された記憶しかない。

いつだって勝手に多紀に関わってきて、飽きたら他の人間に意識を向けてしまう。二度と会うことはないと思ったから、全部忘れてなかったことにしてしまったのに。

今更、また関わりを持たれるなど、冗談ではない。
だから、願う。

どうか、自分の知り合いではありませんようにと。
似たような性質の別の人間でありますように、と。

だが、その期待は、村の広場に立っている背の高い男の姿を見つけたときに、脆くも崩れ去ってしまった。

「あー、やっぱり多紀」

こちらに気が付き、そういつて笑ったのは、確かに見覚えのある顔。

かつて、同じ屋敷で働き、その主人が借金を抱えて奉公人たちを解雇したとき、一緒に路頭に迷った相手だ。

俺は絵描きになると宣言して街を飛び出して以来、一度も会っていない。

あの時は、多紀を含め周りの人間が皆、絵描きなど無謀だと止めたけれども、聞かなかった。

「……久しぶり」

外に言うべき言葉も見つからず、多紀はそう口にする。

「ほんと、久しぶりだよな。魔女が話す店番が、なんとなく多紀に似てるからさ。もしかしてって思ったんだ。前に、このあたりの出身だって言っていたし」

「奉公先を紹介してくれたのが、魔女だったんだよ」

そのことに責任を感じたのか、単に魔窟となりかけた我が家をどうにかしたかったのか、奉公先を失って途方にくれる多紀に、どうせ暇なら手伝えと声をかけてきたのが雫だったのだ。

「そういうあんたは、どうなの。うちの雇い主は、あんたは絵描きって名乗ったって言っていたけれど」

「え、ちゃんと絵描きだよ。一応、俺の絵を気に入って、買ってく

れるような相手もいるんだ。とはいっても、まだまだ駆け出しだから、絵だけでは食べていけなくて、傭兵まがいのことや、商隊の護衛をしてる」

だから、剣なのか。

実用的な剣の重さに納得できた気がした。

彼は、多紀がいた屋敷でも、主人の護衛として働いていたのだ。幼い頃両親を亡くし、叔父である傭兵に育てられたと言う彼は、剣の腕は確かで、人懐っこい性格から主人にも気に入られていた。

誰にでも優しく、誰にでも愛想よくて、結局誰も選ばず、一人きりで行ってしまった男だ。当時、彼に焦がれて、叶わなかった女性を何人が知っている。彼の旅についていこうとした者もいたようだけれど、その誰もが置いて行かれてしまった。

そのことを、男は知っているのだろうか。

「これ、魔女から」

そう言っただ剣を渡しながら、本当は知っていたのではないかとも思う。

結局のところ、誰にも本心は見せなかったし、一番深いところには、誰も立ち入らせなかった。自分に対する好意に対して鈍感なふりをしていたことも、多紀は知っている。

結局、どんなに願っても、きつと彼は一人で行くことを選ぶのだろう。置いていかれる方の気持ちなんて、おかまいなしなのだ。

屋敷内で、年が近いという理由でそれなりに親しかったはずの自分にも、たった今まで連絡ひとつなかったのだから。

「あなたの希望通りの守護魔法をかけてあるそうよ」

「お、早いな。やっぱり評判通りだ」

今も、彼は無邪気に笑って剣を受け取っている。その笑顔は昔と変わらず、人を引きつける華やかさがあった。

それを見ないように少しだけ雫は視線を逸らしたのは、心の中にまだわだかまりがあるからかもしれない。

「うちの魔女は、優秀だからね。安心していいよ」

素っ気ないふりで、魔女の仕事について口にするが、言っている事は真実なので、声に少しだけ誇らしい気持ちがある。

本人には、絶対に言わないが、雫が優秀であることは、多紀は認めているのだ。

だから、人に雫のことを話すときは、胸をはって彼女を誉める。

「楽しそうだなあ、多紀」

男が、多紀の顔をやけに真剣な目差しで見つめながら、ふいにそんなことを言う。

「本当に、楽しそうだ。屋敷にいた頃は、いつも仏頂面しててさ、俺にも怒ってばかりだった」

「それは、あなたがいつもだらしない格好していて、部屋は汚し放題で、血のついた剣も放りっぱなしで……」

言い掛けて、まるで誰かのよう　魔女と同じだと思う。

魔女にも同じように怒ったり説教したり文句を言っている。

でも、魔女とこの男は違う。

どこか、似ている二人なのに、確かに違うのだ。

「なんだかさ、魔女も、俺と似たような雰囲気を感じたのにさ、多紀は魔女のことを話すとき、いい顔なんだよな」

言われたとおりのことを、多紀も思ってしまった。

この男を怒っていたときは、胃も痛かったし腹立たしかったしちつとも言うことを聞いてくれないことが嫌だった。

自分のことをからかってばかりで、本心を見せてくれないから、男を見るのが、少しずつ辛くなっていった。そして最後は彼女を一人残して、いなくなってしまったのだ　好きだと言ったくせに。

「あーあ、馬鹿だよなあ、俺。いろいろ、本当に莫迦だった」
天を仰いだ男の顔は、見えない。

悔いているのか、それとも悲しんでいるのか。どちらにしても、もうすでに終わってしまったことだ。

あの日、彼は一人で旅立ち、多紀は生まれ故郷に戻った。

「同じだよ、私も。いろんな意味で馬鹿だった」

もうちょっと、素直になればよかった。

もう少し、優しくできればよかった。

それでも、置いて行かれただろうけれど、今のように後悔はしなかったかもしれない。

なかったことを思い返して、あれこれ悩むこともなかったかもしれない。

なにより、そうしていれば、ちゃんとお終いに出来ていただろうし、強引に忘れようとする思い出ではなく、懐かしい記憶として残ったはずだった。

「俺のこと、ちゃんと好きだった？ 今更だけど」

「うん。好きだったよ、今更だけど」

今度はちゃんと素直に言えた。あの時は、一度だって面と向かって言えなかったけれど。

「そうか、よかった。俺も、多紀のこと、好きだった。全部、本当に、冗談じゃなくて本気だったんだ」

男も、そうだ。

彼は悪ふざけの延長でしか、その思いを多紀に伝えてくれなかった。

お互いさまだ。

そう思えてくると、自然に笑みがこぼれてくる。最初は雫に言われて嫌々だったけれど、ここで男と会うことが出来てよかったのかもしれない。

男の方も同じなのだろう。

初めて見る、優しい笑みを浮かべている。もっと早く見てみたかったが、今だからこそ、知ることが出来た表情だ。

お互い、これでふっきれたということなのかもしれない。

「魔女に伝えておいてくれ。約束の報酬は、ちゃんと後日届けるからってさ」

「報酬？ お金じゃなくて？」

「ああ。ちょっとお金が足りなくてさ。別のものを渡すって約束を

したんだ」

雫にしては珍しいこともあるものだ。

その報酬について、少しだけ気になったが、雇い主がいいといったのならば、多紀が口をはさむ理由などない。

「わかった、伝えておく」

「じゃあな、またいつか」

「うん。また、いつかね」

そう言って、笑顔で別れた。

いつか、なんていうのは、約束じゃない。あの時別れてしまった二人の道は、もう交わることはないのだ。

それでも、『いつか』という言葉には不思議な響きがある。

またどこかで巡り会えるのではないかという、そんな甘い夢を見ることも出来る。

その時は、今よりもつと言葉を交わし笑いあえることを願おう。

しばらくして、届いたのは、一枚の絵。

どうやら、金が足りないという男に、残りの報酬は多紀でも自分でも描いてくれればいいと、ふざけたことを雫が言ったらしい。

だが、よく見ないと、その絵に書かれている物体が、性別どころか、人物なのかどうかさえわからなかった。

「随分、斬新な絵だな」

雫が絵を見て唸っているが、それはたぶん上下逆さだ。そのことを指摘しようか多紀は悩んだが、元々、上下左右がよくわからない絵なので、指摘するのは止めた。

「昔から、彼の書く絵は、これでしたよ。でも、こういう絵が良いつて言う相手もいるらしいですから、世の中って本当にわからないです」

多紀にしてみれば、もうちょっとわかりやすいほうが、部屋に飾るにも人にあげるにもいいように思えるのだが、何故か新しいもの好

きな貴族や商人の間に、この手の絵が流行ってらしい。芸術方面に疎い多紀には、さっぱり良さがわからない。

「しかし、愛はあるんじゃないか？」

上下左右に何度もひっくり返しながらも絵を眺めていた雫が、そんな感想を口にした。

「どこにです」

「色遣いが、優しいじゃないか。森のようだよ」

言われて初めてそのことに気が付いた。

木々の緑、森に咲く花の色、湿った土。森で見かける色の全てが、その絵の中にあつた。

「でも、やっぱりもうちょっと美人に描いてもらいたかったです」

画面の中央で、向かい合っているらしい、目と口と鼻らしきものがやたらと大げさにかかれた、人だか植物だかわからない人物二人に、多紀は正直に本音を言った。

5・おかえりなさい

ひとりぼっちは、好きではない。

否、一人になるのが嫌なのではなく、いつも誰かが側にいるという生活をしていたから、静かな部屋に一人きりであるのが苦手なのかもしれない。

多紀が生まれた時は、両親に祖父母、姉や兄がすでにいた。家は大きくもなく、かといって小さくもない、村では平均的な造りで、どこの部屋を覗いても、必ず誰かがいて、多紀が一人になるということとはなかったように思う。

少し大きくなった頃には、下に二人ほど弟が出来ていたし、親の手伝いをしていないときは、幼馴染みや兄弟たちと森や村の中を走り回っていた。

働ける年齢になると、村から離れた商家に奉公に出たが、そこでも使用人の誰かと常に相部屋だったし、働いている時間も一人きりということとは殆どなかったのだ。

今はこの家で魔女と二人きりだが、一人という気がしないのは、どこにいても、魔女の気配がするからだろう。

得体の知れない薬草を煎じる匂いだったり、衣擦れの音だったり、煙草の香りだったりと様々な匂いや音がここにはある。だから、同じ場所にいなくても、家のどこかに雫がいるのだとわかるのだ。

けれども、今日は一人きり。

その匂いも気配も、屋内に感じられない。

掃除も、片付けも済ませ、店番をしながら客が置いていった雑誌や本を眺めているだけで、時間は過ぎていく。滅多にこない客も、やはりいつもの如く訪れることはなく、多紀は落ち着かないまま、棚の商品を移動したり、なんとなく机を拭いてみたりと、意味のない行動を繰り返している。

要するに、一人だと退屈なのだ。

基本的に雫は出不精で、せいぜい出かけたとしても、森の中か、一番近い村までだ。日々の日用品を購入するため買い物に行くのも、商品を届けに行くのも、実際にやっているのは多紀なのである。

だが、そんな雫でも、年に数回出かけることがあった。

魔女同士の集まりであつたり、昔世話になつたという人の断れない頼みだつたりとその時々で理由は様々だ。どの時も、必ず面倒だと文句を言うのだが、見た目に反して律儀な雫は、ぶつぶつと言いながらも、相手のところに出向いている。

今回は確か昔なじみの魔女に会いにいったのだつたらうか。

長らくあちこち旅していたが、一箇所に腰を落ち着けたので、是非遊びに来てほしいと、誘いがあつたのだ。急ぎでの用があるわけでもないのに、行こうかどうかと迷っていたようだったが、その土地で最近発見された珍しい薬草を見ることが出来ると知り、はりきつて出かけることにしたのだつた。

「暇」

とりあえず、呟いてみるが、声は空しく響き渡るだけだつた。

日帰りできる距離で、夕方には帰ると雫は言っていたから、実際に多紀が一人になるのは数時間のことだ。それなのに、妙に部屋が広く感じる。

今日だけではない。前するときも、その前するときもそうだつた。

一人きりだと、何かをやる気にもならない。

雫は、店は一日休みにして、遊んできたかどうかと言つたが、友人の誰とも休みがかぶらなくて、店でうじうじする羽目になつている。

結局、同居人がいないと寂しいのは、雫ではなく多紀の方ということかもしれない。

ちりんと可愛い鈴の音がして、多紀は顔を上げる。

そこには、いつもよりも少しだけ着飾った格好の雫が立っていた。

とはいっても、朝確かに結い上げていたはずの髪はほつれ、袖は乱雑にまくり上げられていたのだが。

「おかえりなさい」

そう言うのと、「はいはい、ただいま」と、返された。

続けて、疲れたと言い、荷物を放りなげる。

がしゃんと何かが割れる音が聞こえた気がして、多紀は、何がはいつているんですかと悲鳴のような声をあげてしまった。

行く時には持っていなかったはずだから、出掛けた先で手にいれたものなのだろうが、扱いが雑すぎる。

「あー、なんだかいりいだよ」

「いろいろって、ああ、変な汁がしみ出てる！」

布製の袋は薄い黄色に染められていたが、その一部から青黒い液体のようなものがしみ出ている。

慌てて抱え上げた袋は、近づくに変な匂いもした。

「これ、魚臭いんですけれど」

「そういえば、魚の油漬けがどうか、口にしてたね。魔女のお手製で、独特の方法で付け込んでいるんだってさ。酒の肴になるそうだよ」

そういう食べ物があるということは、多紀も聞いたことがある。

美味だという話だが、値段もそれなりにするし、何よりきつい匂いがするということで、女性にはあまり好まれない。

ほとんど嫌いなものがない雫と多紀は、匂いくらいでは驚かないが、店の商品に匂いがつくのは困る。

慎重に割れたビンの欠片を取り出しながら、さらに強くなった匂いに多紀は顔をしかめた。

「ああ、これ、量が多くないですか。油はほとんど漏れちゃったし、もう今日食べるしかないってことですよね」

他の瓶に詰め替えてもいいのだが、油の成分も作り方もわからない以上、余計なことではない方がいい。

保存食だったとしても、蓋を開けてしまえば食べるしかないのだ。

「責任とって、ちゃんと全部食べてくださいよ」

多紀の小言に、雫がにんまりと笑った。

「やっぱり、家の方が落ち着く。口うるさい同居人がいないのは、どうにも変な気分だったからね」

「口うるさいは、余計です」

もっというろいろ文句を言いたいところだが、部屋中に漂い始めた魚の匂いをなんとかするほうに忙しく、雫の相手をする余裕がない。雫の方は、自分が手伝え、さらにひどいことになるのがわかっているので、店の片隅に移動すると、いつものごとく懷から煙草を取り出した。

部屋の中に漂うのは、煙草の匂い、魚の匂い、それにあちこちに並べてある薬草の匂い。

そこに、雫の気配が重なって、多紀があちこち動き回るたび、空気が流れる。

いつもの日常。

いつもの二人だ。

「せっかくだから、魚に合わせて、とっておきの酒をあけるか」
呑気にそんなことを言う雫も、いつもと変わらない。

昔からそうだ。

年をとったが、雫は変わらない。

変わりものなのも、面倒くさがりなのも。

「ああ、本当に、家は落ち着くねえ」

しみじみとそう言う雫は、すっかり寛いでいる。

「寛ぐ前に、ちゃんと着替えてきてくださいってば」

「はいはい。ついでに酒を取ってくるよ」

あんたの小言を聞くと、家に戻った気がするねと、余計な一言を付け加えると、雫の姿が店の奥へと消える。

そんな彼女の姿を呆れたような顔で見送りながら、多紀自身も、雫がいると、急に家の中が賑やかになった気がすると思う。

振り回し、振り回される関係だけれども、二人でいるのが居心地

がいいから、一緒にいられるのだ。

そして、『おかえりなさい』と言える相手がちゃんといえることは、
なによりも幸せなことなのかもしれない。

6・かえりみち

同居人が待っていると思うと、帰るのも楽しいと知ったのはいつだったろう。

魔女として主に仕えている時ではなかった。

年老いた魔女に拾われて、暮らし始めてからだったような気はする。彼女は、ぼうつとして食事することさえ忘れる雫に、根気よく接した。

おかえりと言われても、素直にただいまとは言えなかったし、どうせすぐ出て行くつもりだったのだ。

それが、いつのまにか年老いた魔女の仕事を手伝うようになり、彼女が亡くなったあと、結局は店を受け継いでしまった。拳げ句の果てに、普通の女性と一緒に暮らすという、昔なら考えられないことをしている。

人生、本当にわからないものだねえ。

夕暮れの森を歩きながら、雫はそう呟いた。

遠くに、薄ぼんやりと明かりが見える。

明るいののは店側なので、きっと多紀はそこにいるのだろう。

誰もこない日でも、多紀はきちんと日が沈むまでは店を開けている。時々サボったかどうかと言ってみるが、雇われている以上そんなことはできませんと、恐い顔をさせてしまった。

真面目というよりは、融通が利かないと言ったほうがいいのだろうが、そういうところを含めて、それが多紀という人間だ。

それに、こうやって雫がたまに家をあけ、帰宅したとき、普段は仏頂面な顔が、嬉しそうに綻ぶ。

客を前にした愛想笑いでも、雫のつまらない冗談に義理で笑う時でもない、多紀自身の笑顔だ。

子供の頃は、もつと頻繁に浮かべていた。

お菓子を渡された時だったり、いたずらに成功した時だったり、頭を撫でられた時だったり、数え上げてみれば、実に様々な状況で、多紀は笑っていた。

あまり笑わなくなったのは、街へ出てからだろうか。

人の下で働くようになり、処世術を覚え、感情を押し殺すようになった。それを大人になったと人は言うのだろうが、たまに村に帰ってくる多紀が、どんどこかわいらしさを失っていくのは、正直つまらなかった。

だから、彼女が路頭に迷った時、つい誘ってしまったのだ。

『うちに来ないか』と。

昔、この森を走り回っていたときのよう、笑ってほしいと思っただけからだ。

かつて一人だったときと違い、雫の足取りは軽い。

変なものもたくさん仕入れてきた。妙なものも手に入れてみた。

多紀はこれを見て、呆れた顔をするだろう。

その時の様子を簡単に想像できて、雫は思わず笑ってしまった。

そうやって、多紀に接しているうちに、自分も感情を表に出すのが苦痛でなくなったのだと、恐らく彼女は知らないだろう。

知らなくてもいいのだ。

知ってしまったて遠慮されるのも嫌だし、気を使われるのも困る。

多紀は多紀のまま、子供の頃と同じように雫を振り回してくれればいい。

もちろん、多紀から言わせれば、振り回しているのは雫の方だと言い張るだろうが。

いつまで続くかわからない生活だけれど、出来れば長く一緒にい

たいものだ、そんなささやかな願いを、最近の雫は抱いている。

7・きいてみたいこと

その客は、いつも無口だった。

多紀が話しかけても、必要最低限の答えしか返ってこない。

購入していく品物は、いつも同じだ。

傷薬、痛み止め、それから眠るための薬。

必要な数だけ口にして、多紀が金額を言つと、無言のままお金を出す。無骨な指先が、取り出したお金を丁寧に数え、それを受け取つた多紀が正しく揃っているかの確認をすると、ようやく品物を受け取るのだ。

そして、最後に失礼する、と口にして店を出て行く。
いつも、同じだ。

だから、他の客と違って、多紀の興味を引いた。

「真面目な人ですね」

そう多紀が言つと、雫が変な顔をした。

たつた今出て行つた男のことを言っているのだとわかっているのだが、雫にはあれが多紀の言うような男には見えていない。

「ただの胡散臭いおっさんじゃないか」

年の頃は30代後半。雫が言うほど見た目は老けてはいないが、どこか威圧感のようなものもあつて、若いとは言いがたい。かといつて、もっと年寄りかと言われれば、あの指先の張りは絶対に違つと多紀は思う。

「いろいろ聞いてみたいですよね。……聞けないですけど」

もちろん、本人が隠したいことを根掘り葉掘り知りたいわけではない。純粹に多紀が気になるだけで、あまりしつこく尋ねるのは、魔女の店の店員としても、してはいけないことだと、わかっている。

「ちなみに、何を聞きたいんだい？」

「そうですねえ。年とか、職業とか、名前とか」

「聞けばいいじゃないか。やましいことでもしていなければ、特に隠すものじゃない」

それはわかつている。

例えやましいことがあつて、偽名や嘘を言つたとしても、どうせ多紀にはわからないのだ。雫も、金さえきちんと払いさえすれば、客の素性など気にしない。

「聞こうとしたんですけれど、もう雰囲気が余計なことは何も聞くな」って感じじゃないですか」

「ああ、なるほど」

雫が納得するほど、男は無愛想だった。そういえば、笑つた顔も見ることがない。

「後は、奥さんがいるのかとか、子供がいたらどんなふうに接しているのかとか、ええと、それから、職場でも同じように無口なのか」

「さすがに、そこまで聞くのはどうかと思うよ」

あくまで多紀の知りたいことだ。本人に聞くわけではないので、好き勝手に思いつくことを言っているだけなのだが、やはり普通は親しくない人間に尋ねる事柄ではない。

「他のお客さんは、聞いていないことでも話すんですけどね」

最初はよそよそしくても、何度か訪れていれば気安くもなる。多紀が聞かれて自分のことを話すこともあつたし、その逆もあつた。

「常連はそんなものだよ」

「あの人も常連のはずです」

少なくとも、定期的に訪れるということを常連の定義とするならば、彼は間違いなくそうだ。

「いまだに、彼の口からは、あいさつと用件以外の言葉を聞いたことないです」

「そつだなあ、確かに私もない」

顔は悪くない。平均的だが、好感のもてる顔立ちだ。

黒い髪に藍色の瞳もありきたりのもので、目を引くものではないが、やや浅黒い肌の色が、他国出身か、両親のどちらかがそうなのだろうと想像させる。ここへくる時の服装も、特に身分を感じさせるものではない。彼が持つ剣も、使い込まれてはいるが、どこにでも売っていきそうな代物である。

「私は、職業軍人かなと思います」

男の手をいつも見ている多紀は、彼の手の堅さや動きを見て、そんなことを考える。

「そうか？ 私は、冒険者が傭兵だと思うな。だいたい軍人なら、薬をここで買う必要はないだろう。支給されるだろうし、軍医もいる」

確かにそうだ。効き目はいいが、魔女の薬は少々高い。しかも、男が手にするのは、あくまで応急処置的なもの。長期に使うならば、きちんとした医者に頼むか、正式に国から許可を得た薬屋を頼るべきだろう。魔女の薬ひとつで、普通の薬がいくらでも買えるし安全安心なのだ。

「でも、眠れない時のお薬も買うんですよ。傭兵とか冒険者は、あまり利用しないと思うんです」

自分の家ならまだしも。宿を利用したり、場合によっては野宿をしなければならぬ職業のものが購入するだろうか。

「まったく別の職業かもしれないぞ。例えば、それなりの屋敷に雇われた用心棒とか。見た感じ、妙に小綺麗な雰囲気だろう？ だが、それほど上等な布地を使った服を着ているわけじゃない」

言われて、男の服装を思い出す。品のいい仕上がりだったが、確かによくある服だ。流行にのったわけでもなく、一点物でもない。ほころんだところも丁寧に繕ってあるから、物持ちはよさそうだ。奥さんがしっかりしているだけかもしれないが。

「用心棒でも、適当な格好をしている人もいますからね。主人が気にしない人の場合、あてにならないかも」

「そうだね、単に男の性格によるものかもしれない」

様々な人がいるわけだから、やはり服装だけで判断するのは難しい。

それらしい格好をしていたらわかりやすいのだが、まさか魔女の店に来るのに正装してきたり、仕事着を身に付けてくるものはいないだろう。

「剣を握る仕事っていうのは間違いなさそうですね……

あ、傷薬とかだから、剣術道場の師範とかはどうでしょう？ 似合いますし」

「おお、似合いそうですね。寡黙な剣術師範か」
雫も、多紀の考えにのってくる。

「弟子には厳しそうですね」

「そうか？ 案外面倒見はいいかもしれないぞ」

「でも、私は、その方がいいかな。やっぱり職業軍人や傭兵は恐いです」

二人して好き放題言いながら、おそらくきつとどれも正解ではないのだろうと思っている。

それくらい、彼の素性の推測は難しい。

だからこそ、こうやって盛り上がってしまうのだろう。本人が聞いたら怒り出しそうではあったが。

それからしばらく、二人で考えられる限りの職業を考えたあと、多紀は息を吐いた。

「考えてみると、結構いろいろ思いつく職業がありますね」

もう少し想像してみるのも楽しいかもしれない。

もちろん、次に男が来たときに聞いてみたいことなどなに1つ口にはしないけれど、それでも、男が帰った後は、こうして二人で楽しむのだろう。

でもいつか、本当のところを聞いてみたいとは思っている。

とりあえずは、最初は名前から、だろうか。いや、それだと、告白でもするみたいだ。

そんなことを考えながら、多紀は客が出て行った店の扉をもう一

度眺めた。

8・くちづるさい

雫は朝が苦手だ。

起きるのが面倒だし、着替えるのも億劫だし、朝ご飯を食べるよりも寝ていた方がいい。

だが、同居人の多紀は違う。

朝は早いし、朝食の支度の前に、家の周りの掃き掃除までしている。街で働いていたときはもっと早起きだったから癖になっているのだと本人は言うが、雫からしてみれば、信じられないことだ。

そのせいなのか、最初の頃は、多紀も、自分を起こそうと必死になっていた。だが、幾らひっぱっても寝台から離れない雫のことは諦めたらしい。

その時、『そういう人だった』と、なんともいえない顔をした多紀に言われ、複雑な気持ちにはなったが、敢えて何も言わなかった。面倒だからである。

ふてくされたように返事をしない雫に苦笑した多紀は、その代わりにと条件を出した。

必ず昼までには起きてください、と。それさえも、時々破ってしまっていたのだが、この頃は多紀の作る朝食兼昼食のおいしさに負けて、とりあえず部屋から出るようにはしている。

それが作戦なのか、朝食兼昼食には、必ず雫の好物が含まれていた。時々、新作のお菓子とやらもついてくる。逃せば、それは森で遊ぶ子供たちに渡されてしまうので、文句をいいつつも、起きるようになってしまった。

これでは、まるで多紀の手の上でうまく踊らされているようではないか。

おかしい。この家の持ち主は雫で、雇われている立場が多紀のはずだ。

それとも、最初はただの店番兼住居の家事全般をやってもらうと

いう条件だったはずの多紀のことを、いつのまにか同居人と認めてしまったせいなのか。

一緒に暮らし始めて、もう随分立つのだ。

互いの癖も、考え方も、だんだんわかってきた。性格も年齢もまったく異なる二人がそれなりにやってきているのは、慣れというだけではない。

なんとなく、側にいても苦痛でないというのも、理由だ。

うるさく言われて腹も立つし、二人で暮らしていると面倒なことも多いが、それでもお互いいなくなれば寂しいと思うだろう。何かあれば心配するし、病気になるれば、できるだけのことはしようとする。気が付けば、そういう関係になっていたのだ。

だらしなさすぎる雫と、生真面目すぎる多紀。二人の駄目な部分を、互いに補いあっている自覚は雫にもある。

結局は、お互いがよければそれでいいのではと最近では思っているくらいだ。

窓の外から、鼻歌が聞こえてくる。

少し調子が外れているが、多紀だ。小さい頃から、歌は得意ではなかったなと、そんなことを思い、自然に笑みがこぼれる。

今は、夜が明けてほんの少し立った頃。外がようやく明るくなってきたが、季節柄部屋の中はひんやりとしている。

実のところ 雫はとくに目は覚めているのだ。

ただ、こうやってごろごろしているのが、至福の時間なのである。暖かで、ふんわりとした寝具はちょうどいい肌触りで、いつまでも潜っていたい。目を閉じれば寝てしまうほど居心地がいい中、どうして外に出たいなどと思うだろうか。

などと、多紀が聞いたら怒ってしまいそうなことを考えていた雫は、寝具の中に潜り込んだまま、耳を澄ます。

鼻歌と共に、外を歩き回る音も聞こえている。

春ならば、柔らかい音だし、夏は少し渴いた足音だ。秋にはそれに枯葉を踏みしめる音が加わって、冬は雪でも降れば足音そのものが聞こえにくい。

『この国には、四季というものがあるのよ』

そう教えてくれたのは、雫の前にここに住んでいた魔女だ。初めて雪が降った日、庭が真っ白になったのを見て驚いた。雫が生まれた国は暖かなところで、冬と呼ばれる季節でさえ、ほんの少し寒いくらいで、雪など降らなかったのだ。

これほど寒いとは思わなかったし、暖かな寝台から出ることがこんなに辛いのも知らなかった。

そつえば、あの人も、口うるさい人だった。

自分の祖母といつてもよい年齢の魔女は、生活面に関しては厳しい人だったのである。

主がいた頃は、魔女としての力が必要でない時、何をしようが文句は言われなかった。仕事さえ完璧にこなせばよくて、そこに感情は必要ない。失敗しても、それはそれで他の策が用意されていて、主はほんの少し顔を顰めるだけで、何も言わなかった。

それでも、今よりはもっとちゃんと起きていた気がするし、食事も朝昼晩ときちゃんと口にしていたはずだ。

だらしなくなったのは、ここへ住み着いてからで、馴染みすぎてくつろぎすぎて、ぼうつとすることが多くなった。

もしかすると、緊張しなくなったからかもしれない。魔女として主に仕えていた時は、常に気を張り詰めていた。

主や使用人の視線を気にしていたのは、どこにいても常に監視されていなかった。魔女である自分が怯えるということは少なかったと思うが、見られる度に嫌な気持ちになり、決して隙は見せないようにしていた。

今の自分とはまるで違うし、もう一度あの生活に戻れと言われても、嫌だろう。きっとこういっただらしなところが本来の雫の姿な

のだ。

年老いた魔女は、雫が朝起きないことに關しては、諦めたようだが、それ以外のことは事細かく注意してきた。元々、いろいろな面に厳しい人だったのだ。

本気で怒ってくるから、こっちも本気で文句を言った気がする。

それを思えば、まだ、多紀は可愛い方だ。

口うるさいけれど、雫が強氣に出て絶対に譲れないと言えば、困った顔をして結局は折れてくれる。

それなりに妥協はしてくれるのだ。

一応年長だし、雇い主ですから、と付け加えるのを忘れないが。それでも、あの口うるささがなくなってしまうえば、寂しいと思うのだろう。

そんなことを思う自分に苦笑しながら、外から聞こえる多紀の鼻歌を子守歌代わりに、雫はもう一度眠りの中へと落ちていった。

9・けんかした

「あの人ったら、ひどいのよ!」

店の扉を開き、足音も高く飛び込んできた女性は、息を弾ませながら、そう叫んだ。

本を読み耽っていた多紀も、ぼんやりと商品棚に奇麗に並べられた瓶を眺めながら煙草を吸っていた雫も、そちらに視線を動かし、絶句している。

「もう、もう、絶対に許せない! 雫さん、何かあの人を困らせる薬はないの!」

「なんだ、柚那じゃないか。旦那が浮気でもしたのかい?」

興奮している柚那に、驚きからすぐに平静を取り戻した雫が、からかうように言う。

多紀とは幼馴染みの間柄で、一緒に森を駆け回っていた仲だから、当然雫も柚那のことは幼い頃から知っている。

6年前に、同じ村出身の男性と結婚し、すでに子供も2人いた。最近では、少しふくよかになってきた体が悩みの種で、この店へも少しでも痩せられる薬がないかと、おしゃべりがてら顔を覗かせている。

もちろん、痩せる薬に関しては、『楽して痩せる薬はないよ』と雫に毎日も言われているのだが、いまのところ諦める気配はなさそうだった。

「違います! 浮気だったら、家から追い出してやるところだった……じゃなくて、浮気も嫌だけれど、もっと困ったことになっているんだってば」

そういえば、柚那の夫である彼女よりも1つ年下で、入り婿だったはずだ。雫も多紀も、柚那同様小さい頃から知っているが、大人しくて目立たず、気も弱かった。遊ぶ時も、他の男の子たちと違って走り回ることはずせず、転んでは泣き、森で小さな獣を見ては泣き、

女の子にきついことを言われては、泣いていた。

取り柄といえば、優しいことと、村一番の器量よしだったことだ。少なくとも、大きくなつて髭が生えてくるような年になるまでは、いつも女の子に間違えられていた。

そんな彼を、弟のように　　もしかしたら、一番の子分のつもりだったのかもしれないが、かまっていたのが柚那で、彼も彼女に一番懐いていた。

それが、いつ恋に変わったのかわからないが、気が付けば村公認の恋人同士になり、仲が良かった幼馴染み同士の中では、最初に結婚したのだ。

他の子のように乱暴でもないし、きちんと仕事もするし、良き夫、良き父親でもあるのだが、ただひとつ、彼には困った趣味がある。恐らくそれが原因の喧嘩なのだろうが、柚那の様子はいつもよりも激しい。

一体何をやらかしたのか。

人の良さそうな無駄に美形な幼馴染みの顔を思い浮かべながら、多紀は溜息をつく。

「浮気じゃないなら、何やったの」

話が進まないで、とにかく原因を突き止めようと、多紀は尋ねた。

とたんに、柚那の目が釣り上がる。

「また、悪い癖が出たの!」

「あー、なるほど」

多紀は納得したように頷き、雫はやれやれとでも言いたげに肩を竦めてみせた。

柚那の夫の悪い癖。それは、無類の賭け事好きだということだ。それほど強くもないのに、賭け事となると、目の色が変わる。

村人たちと、酒場や仕事の合間に少し遊ぶくらいならいい。皆、彼の賭け事好きは知っているから、よほどのことがなければ、無茶なことはさせない。反対に諫めることの方が多いし、それでもやめ

ないようならば、金ではなくちよつとした食べ物や収穫物程度を賭けたりする。時には、仕事の手伝いをするかしないか、ということもあった。

結婚して子供が生まれてからは、独身時代のように街へ行つては身ぐるみ剥がされるような無謀な賭け事は止め、おとなしくしていたようで、多紀としては安心していたのだが。

「この間、うちで育てた野菜を市へ売りに行ったのよ」

「柚那のところの畑でとれた野菜、おいしいものね」

お裾分けに売り物にならないものをもらったこともあるし、まとめて購入したこともある。

「いつもは私もついていくんだけど、今回はうちの下の子が熱を出してね。一人で行かせたわけ」

そうしたら、あの馬鹿、街で古い知り合いに会って、うまいことのせられて賭け事をしたあげく、売り物を全部とられたのよ、と柚那が一気にまくし立てた。

相手の出した条件が、野菜を売った金額の数倍だったらしいから、そのあたりでおかしいと思うべきなのだが、相手の誘いが余程上手かったのか、それとも彼が誘惑に勝てなかったのか　どちらにしても、大損をしたのは間違いない。

「ああ、もう、腹が立つ！　一言、文句を言ったら、あの馬鹿、なんて言っただと思っ？」

「さ、さあ？」

「お前のために頑張ったのに、よ。頑張る方向が間違つてると思うでしょ」

その後は、途切れることなく彼女の口から出てくるのは、夫に対しての日頃の不満だった。

「とりあえず、落ち着いて」

ようやく多紀が声を出したのは、柚那が息もつかせず夫への文句を言い切り、とうとう言うことが無くなった後だった。

「そうだ、いいものがあるよ」

何かを思いついたというふうに、雫がぼんと手を叩いた。

「多紀。その棚にある、例のあれを出しな」

「え」

あきらかに狼狽えた多紀が、いいのかと問いかけるように雫を見た。

「いいから、いいから。作っては見たものの、使い道がなくて困っていたんだ」

「あきらかに怪しげな感じがしていますけど」

雫と多紀の様子を見ていた柚那が、言葉だけは一応訝しげだが、身乗り出し、目は輝いている。

そういえば、昔いたずらを決行するとき、先頭にたつのは、柚那だった。男の子たちが尻込みするような場所でも平気で入っていたし、自分より大きな動物にも怯まなかった。

あまりにも無謀なことばかりするので、彼女の両親はいつも青筋を浮かべていた気がする。

「感じじゃなくて、たぶん、かなり怪しいと思うよ」

そう言いながら、棚から多紀が取り出したのは、一枚の布だった。柚那の前で広げると、淡い光を放ち、わずかな空気の流れでも揺れるほど、薄い。透かしてみれば、反対側が見えるほどだ。ただ、残念なことに、よく見れば、ところどころで織り目がよじれていたが。

「不思議な布だね」

手に取って間近で眺めながら、柚那は首を傾げる。

「どんな糸を使っているの？ よほど高級な糸でも、ここまで薄く作るなんて、無理だよ」

「糸を加工したのも、織機で織ったのも私なんだよ」

得意そうに言う雫に、柚那はぎょっとしたように目を見開いた。

「えー、加工はともかく。雫さん、織機壊したんじゃないの。でも、

そうか。だから、あちこち織り目が緩んでいるんだ」

「一言多いよ、柚那」

「そうよ、柚那。織機は1回しか壊れてないから」

修理をしたのは多紀なので、間違いない。こんがらがった糸をほどくのには多少手間取ったが、多紀でも修理出来る程度の壊れ方だったので、雫にしては珍しいと思った記憶がある。

「お前も失礼だね、多紀」

柚那だけでなく多紀にまでそう言われて、雫は顔を顰めている。

自分としては、むしろ誉めてもらいたかったと言いたげだった。以前使い物にならないくらいに織機を駄目にしたことから考えれば、随分成長しているはずなのだ。多紀が厳しすぎるのだと反論したいが、じろりと睨まれてため、理不尽だと言っに留まった。

「これはね、ちよつと特殊な糸で出来ている布さ。試作品だけどね、人の心に介入する魔力の媒体になる」

物騒な言葉に、多紀と柚那は息を飲む。違法なんじゃないのか、と内心で少しだけ思った。

「もちろん、ひとつだけ条件付け出来るって程度にしているし、効力は弱い。操るっていうのもちよつと違うからね」

「どう違うんですか？」

「賭け事を嫌いにさせたり、止めさせたりすることはできない。出来る魔法がないわけじゃないけれど、それをやると、人格そのものに影響が出る。最悪、精神が壊れるって可能性もあるしね」

確かに、元からの性格や性癖を、本人の努力ではなく魔法の力で無理矢理変えれば、どこかで綻びが出るのだろう。

「今回みたいな無茶な賭けをしたときだけ、発動する魔法を布にかけるんだよ。で、その布を、普段着る服や小物に縫い込んでおくのさ。で、いけない賭け事をしようとする、こう、びりびりと」

大げさに身を竦ませて痺れる仕種をしてみせる雫に、多紀と柚那は顔を見合わせた。

「い、痛そう」

控えめに言いながら、多紀はびりびりする瞬間のことを考えて身震いした。前に、雫が作ったおもちゃを触って、『びりびり』したことがあるのだ。あれは、いたずらが過ぎる多紀と柚那に対するお仕置きだった気がする。

「ねえ、柚那。本当に実行するの？」

かつて味わった気持ち悪さを思い出してしまった多紀が、恐る恐る尋ねると、同じ経験をしたことのある柚那は考えこんだ。

「そうだね。考えてみれば、そういう方法で止めさせるのはよくない気がする。もう一度だけ、話し合ってみるよ。多紀たちと話していて、少し頭が冷えたし。……あの人だって、なんだかんだいつて、反省しているんだし」

柚那の夫は、結局のところ自分の妻には頭が上がらない。気が弱いからというわけではなく、やはり自分の悪い癖のことはわかっているし、妻が自分を怒る時には、ちゃんと理由があるということも理解しているのだ。ただ、幼馴染みの気安さで、互いが感情的になったとき、本音を言いすぎてしまうだけで。

「話し合いで納得するなら、そうすればいいんだよ。で、それでも使う気になったら、来ればいいさ。お代は試作品だから安くしとくし、別に旦那のことだけじゃなくても、望む魔法をかけてあげるよ」まるで性悪な魔女の如く、怪しげで意地悪げな笑みを浮かべて、雫は言う。

「うわー、悪い魔女みたい、雫さん」

子供向けの本に出てくる悪い魔女の見本のような笑顔を引っ込めると、雫は、大げさに驚く柚那に向かって手を伸ばし、その頭を撫でた。

「そうそう。あんたはそうやって、昔みたいに明るく元気な方がいい。旦那に言えない文句でもあるんなら、ここへ来て愚痴ればいいだけの話さ」

「雫さん……ありがとう」

しおらしく目を伏せた柚那の頭を更にぐしゃぐしゃと雫が撫でる。

「それに、そろそろ帰らないと、子供たちも心配するだろう?」

雫も多紀も、柚那の子供たちとは顔なじみだ。かつての多紀たちと同じように、森は彼らの遊び場で、この『魔女の店』に顔を覗かせるのも珍しくない。

ここまで大きな喧嘩はさすがに少ないが、小さな喧嘩をするのはよくあることで、柚那たちはその度に大騒ぎする。仲直りするのも早い。子供たちにとっては、その度に恐くなる母親と、おろおろする父親を見るのは、悲しいらしい。柚那は知らないが、子供たちが雫に、両親が仲良くなる魔法はないかと尋ねてきたこともあった。

「あんたたちが喧嘩して、一番悲しむのは子供たちだからね」

「わかってます。……そうだね、私も両親が喧嘩したら、すごく悲しかったもの」

懐かしむようにそう呟いて、柚那はよし、と気合を入れるように自身の頬を叩いた。

「もう、帰るね。きっと、あの馬鹿、迎えに来ることも出来ずに家でおろおろしていて、子供たちにいろいろ言われている気がするし」

気が弱い彼は、柚那がここへ来ていることはわかっているはずだった。何かあれば、友人である多紀のところへ行くことは村の人間なら誰でも周知の事実だ。

「ごめんね、多紀。大騒ぎしちゃって」

「気にしてないから。今度は子供たちと一緒に来て」

「そうする。あの子達、魔女の店のお菓子はおいしいって、いつも言ってるから」

入ってきたときとは違い、幸せそうに笑う柚那に、多紀もほっと息をつく。また喧嘩はするだろうが、それをちゃんと乗り越えていける強さがあることを多紀は知っている。

だからこそ、こうやって幸せそうに笑うことが出来るのだろう。

少しだけ、幼馴染みを羨ましく思いながら、家族の待つ家に戻っていく柚那を、多紀は見送った。

10・じつして、ああして

店の扉が、可愛らしい鈴の音を鳴らしながら開いた時、多紀は大きな荷物を抱えて考え込んでいた。

しばらく寒い日が続き、昨日は雪も降っていたから、客は来ないだろうと、すっかり油断していたのだ。だからなのか、慌てて振り返って客に愛想良く笑いかけようとして、転びそうになった。

持っていた荷物は転がり、自分自身も床に体を打ち付ける。そう思ったのに、そうならない。

何かがすばやく床と多紀の間に滑り込んできて、衝撃を和らげたのだ。

自分を抱え込んでいる、この感触は間違いなく人　　しかも、見たことのある客の一人。

いつも、雫と二人で話のネタにしている無口な客だ。

体格がいいし、鍛えているとは思っていたが、想像以上に、男の体は硬かった。

厚い上着のせいだけではなく、かなり中身はがっちり系とみた。考えてみれば、触れたことがあるのは、男の指先だけなのだ。

今、その指先は、手袋に包まれて見えない。

そのことを何故か残念だと思い、慌ててその考えを振り払う。そもそも、こんなふうに呆けたように男の上ののったままなのは、はしたないことだ。男にしても迷惑だろう。

そう思い至った時、男が身じろぎした。

「あ、ありがとうございます」

慌てて男から体を離し立ち上がると、頭を下げる。男の方も、ゆっくりと身を起こした。

「ごめんなさい。どこか怪我していませんか？」

心配そうに尋ねると男は無言で首を振る。それどころか、反対に気遣うような目差しを向けられてしまった。

「ええと、私は大丈夫でした。本当に助かりました」

多紀がそう言つと、口元を緩め、男は微笑んだ。

反則だ、と多紀は思う。普段、無口であり感情を出さない人が、こういう顔をする、妙にかつこよく見えてしまう。

しかも、初めて見る笑顔は、色んな意味でやばかった。前に幼馴染みの柚那が、無愛想な相手が、ふと違う表情になると、意外に胸にくると言っていたが、こういう心境なのだろうか。

いや、しかしここでときめいていても仕方ない。とりあえず、彼は客だ。

そう思つて居住まいを正した多紀だったが、男がじつと自分と見ていることに気がつき、狼狽してしまった。

目が、何をしていたのかと問いかけている気がする。

気がするだけで、実際は呆れかえっているのかもしれないが、そんなふうには解釈することにした。でなければ、この妙に重苦しい沈黙に、多紀が耐えられない。

「今日はさすがにお客様が来ないだろうと、片付けをかねた模様替えをしていたんです」

ああ、と溜息にも似た声が、男から聞こえた。

外された視線の先には、うすく曇つた窓がある。はっきりは見えないが、薄暗い景色の中に、白いものが混じっているのがわかった。昨日からの雪は、まだ降り続けているのだ。

「ただの気分転換のつもりだったんですけれど、つい夢中になってしまつて」

店の持ち主でもある雫は、居心地さえよければ、内装にも物の置き場所も気にしない。基本的には、多紀の好きなようにしていいということになっている。

多紀自身は、室内や店内の模様替えをするのが楽しいから、雫の許可のもと、気が向けばいろいろといじっているのだ。

「そうか」

男がぐるりとあたりを見回し、感心したように呟いた。

何だろうと男を見ると、少しだけ考え込んだ後、口を開く。

「いつも居心地がいいと、そう思っていた」

「え、は、はい？」

思わず声の上擦ってしまっていた。まさか、この人がこんなことを言うとは思わなかった。むしろ、内装とか雰囲気とかには興味が無い気がしていたのだ。

やはり人は見た目ではわからない。

それでも、誉められたことは嬉しかった。照れくさくはあるが、普段、そういうことを言ってくれる人はいないのだ。今までここに来た客たちも、気が付いていても面と向かって何かを口にする事はなかった。

「……ありがとうございます」

小さくお礼を言つと、男は表情を緩めたまま頷いてくれた。

「ええと、今日もいつもの品でいいですか？ 前来られてからそれほど日にちがあいていませんけれど、もしかして足りませんでした？」

照れ隠しもあって、多紀は男から目を逸らすと、店員らしくそう言つた。

「いや」

だが、多紀の質問に、男は静かにそれだけ告げる。

しばらくの沈黙のあと、言葉がさすがに足りないと思ったのか、再び口を開いた。

「量は十分だった。ただ、しばらく遠出をしなければならなくなつたので」

そこで、男は言葉を切つたが、恐らく続くのは『遠出するぶんの追加が欲しい』ということだろう。客としてやってくる男との付き合いは、これでも結構長いのだ。雰囲気や視線、表情などで、なんとなく言いたいことを当てることは出来る。たまに間違えるのは、ご愛敬だ。

それよりも、多紀が驚いたのは、男には珍しいくらいにたくさん

の言葉を聞いたことだ。こんなに男の声を聞いたのは、初めてではないだろうか。

しかも、男は、『だが、その前に』と、さらに呟いた。

何のことを言っているのかと思って男を見てみると、彼はそのまま、床の上の荷物を拾い上げると、『どこへ置けばいいのか』と尋ねてきたのだ。

「あ、いえ。そのあたりに投げておいてもらって、全然かまわないです」

元々、模様替えは一人でやるつもりだったし、普段から手伝ってもらう男手などないのから、少しくらいの力仕事は平気である。それに、客に手伝ってもらうわけにはいかない。

「女性一人で模様替えは大変だろう」

「だ、駄目ですよ。お客様なんですから」

男の手から、荷物を取り返そうと多紀は手を伸ばしたが、あっさりとかわされてしまった。

「いつも、この店には世話になっている。それに、あなたのする模様替えとやらは、楽しそうだ」

何故、そうなるのか。一度くらいなら社交辞令で言ったという可能性もあるが、どうやらそうではないようなのだ。

それでも、彼はお客様。

お客様にそんなことはさせられないと食い下がる多紀に、男は再び笑った。

だから、その笑顔は反則なんですってば、と言いたいのをぐっと堪える。

「雫さん 店主に怒られてしまいます」

さすがにここまで言えば、あきらめてくれるだろう などという考えは、甘かった。

「ならば、一緒に怒られればいい」

あっさりと男はそういつてのけた。

そっという問題ではないのだ。そう訴えるが、男も引く気はないら

しい。

「さて、これはどこに置けばいいのかな」

そう強く言われ、結局多紀は折れてしまったのだった。

「……何やつているんだい、あんたたち」

雫が店に現れた時、そこでは二人の男女があっちこっちに荷物を動かしている真っ最中だった。

「ええと、いろいろわけあって、こういうことになっています」

「手伝っている」

重なった二人の言葉に、雫がなんともいえない微妙な表情を浮かべる。それを見返した多紀の顔は、どこか疲れ切ったものだった。

「雫さんが言いたいことはわかります。お客様にこんなことをさせるなんて、駄目だってことも」

「なるほど、押し切られたんだね。そうか。見た目と違って、このお客は意外に人のことを見ているようだね」

多紀は、押しに弱い。

笑顔でも浮かべてお願いされると、押し切られてしまうこともしばしばだ。金銭に関しては厳しいのに、知り合いや、ちょっと親しくなった相手に対しては結構甘くなる。悪意のない純粋なお願いなら尚更だ。

実際、それでよく雫に拝み倒されている。

男は何も言わなかったが、否定しないところを見ると、案外雫の想像はあたっているのかもしれないかった。

「雫さん。そういうこと言っている暇があったら、手伝ってください。というか、ここは私が手伝うから、模様替えは大丈夫とか、そう言い切ってくれたら嬉しいんですけど」

「嫌だ」

雫はあっさり言い切ると、そのまま壁際へと移動する。

「面倒だし、だいたい、私が手伝うと邪魔になると思うよ。物を壊

してもいいというなら、やってみるけどね」

「気持ちの問題ですってば。本当に手伝うかどうかは別な話です」
その時、室内に響いたのは、小さな笑い声だった。雫でも多紀でもないそれは、男のものだ。

わずかに口元を緩めた男が、二人を見て笑ったのだ。

多紀は、さきほど笑顔を見たが、雫は初めてである。少しだけ驚いたような顔をしたが、すぐにそれは人の悪そうな表情に変わった。「いやはや、想像以上に面白い客だね」

なにが雫を喜ばせているのか、最近では一番の機嫌の良さだ。今朝までは、寒いと文句を言って不機嫌そうにしていたのに。

「面白いものをみせてもらったし、そうだね。今日はみんなで模様替えてことにしよう」

壁際から多紀の側に移動した雫の手には、いつのまにかハタキが握られている。

普段、絶対に触ったりしないものだから、持ち方が変だと指摘したいのに、多紀には言えなかった。不気味すぎて。

「ほら、多紀。あんたが指示ださないと、進まないだろ」

「はあ」

期待するように雫と男に見つめられ、多紀は肩を落とした。

ただの、気分転換の模様替えだったはずなのに、どうしてこんなことになったのか。

多紀は、今日何度目かの愚痴を、心の中だけで呟いた。

結局、あれこれ指示を出すことになってしまった多紀だが、模様替えは思ったよりも早く終わってしまった。

多紀一人では、夕方までかかっていたはずだ。

雫はともかく、こちらのお願い通りに丁寧に片付けを手伝ってくれた男のおかげだろう。

「ありがとうございました。あの、お茶でも如何ですか？」

多紀が、手伝ってもらったお礼も兼ねてと思うと残念そうな顔を
されてしまう。

「いや、そろそろ戻らねばならない」

「あ、もしかして、やっぱりお時間がなかったんじゃないんですか」
押し切られてつい甘えてしまったが、魔女の店がある森は、大き
な街道から少しはずれた場所にある。一番近い村はすぐそこなので、
遠くからやってくる客の中には、その宿で一泊するものもいるく
らいだ。半日も馬を走らせれば、大きな街につくから、そちらに宿
を取るというものも多い。

だが、この男は、いつも宿には泊まっていけないし、馬や馬車をど
こかに預けている様子もない。

どうやって村までやってくるのだろう。

妙なことが気になってしまったが、なんとなく聞きづらいものがある。そういうことは、なるべくこちらから尋ねない方がいいとい
うのは、魔女の店に来るものの殆どが訳ありだからだ。

「夕方までに戻ればいいから」

こちらが気を使わずにすむように言ったことかもしれないが、一
応、安心する。もし本当に忙しいのならば、男はきつとそういうだ
ろう気もしたからだ。

「すぐに、品物を準備します」

必要な数を確認しながら、急いで商品を取り出す。いつもよりも
多い量は、やはり遠出とやらと関係あるのだろう。

男は、いつものように丁寧とその品物を確かめ、いつもと同じに、
きつちりと金額ぶんだけの金を差しだした。

「今日は楽しかった。ありがとう」

何故お礼を言われたのか。問い返そうと口を開いたが、遮るよう
に男が言葉を続けた。

「次に来るのがいつになるかはわからないが、茶はその時飲ませて
ほしい」

「あ、はい」

思わず返事をしてしまうと、男がまた口元を緩める。

考えてみれば、男がこれほど表情を変えるのも初めてのことではないだろうか。

いろんな意味で、驚くことばかりだ。

「お待ちしています」

多紀はそう言って頭を下げた。今回は出来なかったが、次の時のために、とびきりいいお茶を仕入れておこうと思いながら。

そして、男はいつものように『失礼する』と言って、店を出て行った。

「なんだ、あの男。意外に話すじゃないか」

男を見送ってから、雫は驚きを隠しもしないでそう言った。

「びつくりしました。口数は多くないですけど、こんなに会話が続いたのは、初めてかもしれない」

新記録です、と多紀も言う。前回、もっと話が出来たとは思っていたが、ここまでいろいろ会話が出来るとは思えもしなかったのだ。

偶然とはいえ、模様替えをしていたのがよかったのかもしれない。
「面白い日でしたよ、今日は。……あ、しまった」

最後に呟いた声を耳ざとく聞きつけた雫が、あまり興味なさそうに尋ねてくる。

「あんたがそんなに悔しそうな顔をするってことは、お代を間違えたのかい？ それとも、お釣りを渡し忘れたとか」

「違います。あの人、毎回、きっちり金額通りのお金しか渡してこないし」

「だったら、なんだい？ いい男だから、口説こうとしたのに、しそこねたとか」

「なんで、私があの人を口説くんですか」

「そうだったら、意外に面白いかと思つてさ」

「それ、面白いのは雫さんだけの気がするんですけど」

実際、そういうことになったら、何かにつけてからかわれそうだ。

「それなら、何が『しまった』なんだい？」

「名前ですよ。聞き損ねました」

絶好の機会だったのだ。少しだけ、仕事以外の話もしたし、なんとなくいろいろ聞けそうな雰囲気もあった。

それなのに、それなのに！。ぎりぎりと、上着の裾を握り締める
と、多紀は唸る。

「すごく悔しい気分です」

そんな心底がっかりした様子の多紀に、雫は豪快な笑い声を上げたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0728z/>

魔女の小さな森

2011年12月19日17時47分発行